

「日本の庭にて」

藤原 道夫

来日した R. ハーンは4か月後に松江に赴任し、約1年5か月の滞在中最後の半年ほど武家屋敷に住んだ。屋敷内に大小3つの庭があり、それらをつぶさに観察し、また以前に見たことを重ね『日本の面影』に「日本の庭にて」をまとめた。先ず石について述べている。

「日本の庭園の美を理解するためには、石の美しさを理解しなければならない。石といっても自然石のことである。石にもそれぞれ個性があり、石によって色調と明暗が異なることを十分に感じとれるようにならなくてはいけない・・・」

そして、日本人のなかには生まれながらにしてその感覚が宿っていると指摘する。

これは桂離宮を参観しながら私がまさしく感じてきたことだ。今年3月下旬に訪ねた栗林公園（高松市）でもその感を強くした。小雨に濡れた敷石一つ一つの特徴がよくみてとれた。

自然石のみでなく、日本人は切り石を扱う技にも長けている。切り石を使った造形美についてはすでに「桂離宮を巡る」のなかで述べた。

ハーンは、石がどのように配置された時に美しさを発揮するかについては考察していない。石ないし石組みは、水をたたえる池や流れ、苔や木々の緑があってこそ一段と美しさを発揮するのではなからうか。ハーンの住んだ武家屋敷の3つの庭それぞれに池があった。彼はそれが生み出す美観については述べていない。池の周りの木々、花々、集まってくる昆虫、鳥などについて事細かに書いている。桜を「自然が生み出した最も素晴らしい花」と称賛し、ツクツクボウシについて「これにかなう蝉は世界中探してもいない」という。その他そうなのかと思う記述が多い。

ハーンは庭石が仏に例えられ、大きな木に魂が宿ると信じられていることを知り、日本の庭が「草も木も、また岩も石も、まさに一切涅槃に入るべし」を奉じている宗教が生み出した芸術だと考えた。これには異論もあるだろう。庭の成立は多面的だ。彼はまた「昔ながらの安らぎと趣をもたらす庭が消えてゆく運命にある」と危惧した。このことは現在でも一考を要する問題ではなからうか。開発が一段落した現在、古い庭は少なくない。庭は生きている、常に手当を施して荒廃するのを防がねばなるまい。